

18 世紀半ばのベルンにおける自由化運動 「ヘンツィ陰謀」と文学におけるその影響

— G. E. レッシングの未完の戯曲

『ザームエル・ヘンツィ』と A. v. ハラー —

田 村 久 男

現代スイスの人気女性作家エヴェリーン・ハスラーは、2004 年に発表した歴史小説『テルの娘 — ユーリエ・ボンデーリと自由の時代』(Tells Tochter. Julie Bondeli und die Zeit der Freiheit)¹⁾で、ベルンで知識人たちのサロンを主催し才媛の誉れが高かったユーリエ・ボンデーリを主人公に 18 世紀啓蒙時代のベルンの政治的、文化的な状況を描き出している。ユーリエ・ボンデーリ (Julie Bondeli, 1731-1778) は、一時期スイスに滞在した若きヴィーラントの婚約者であり、また、同じくヴィーラントのかつての婚約者であったドイツの女性作家ゾフィー・ラ・ロッシュをはじめとして、ヨーハン・ゲオルク・ツィマーマンやヨーハン・カスパール・ラーヴァーターら多くの文化人たちと文通し、また、その革命的な社会思想が危険視されていたジャン＝ジャック・ルソーの熱心な擁護者としても知られている。ベルンの名家ボンデーリ家の娘であったユーリエは子供の頃から知識欲の旺盛な少女であり、父親は彼女に家庭教師をつけて英才教育を施した。この少女時代のユーリエ・ボンデーリ家庭教師だったのが作家ザームエル・ヘンツィ (Samuel Henzi, 1701-1749) である。ヘンツィはユーリエに数学や哲学など、当時最新の知識を教えるが、1749 年に起こったベルンの政権転覆クーデター未遂事件、いわゆる「ヘンツィ陰謀」に連座して処刑されることになっ

た。ハスラーの小説『テルの娘』のタイトル自体が、自由を求めて暴政に挑むヴィルヘルム・テルを扱ったヘンツィの戯曲『グリスラー、あるいは罰せられたる野心』(Grisler ou l'ambition punie)に基づいており、綿密な資料、調査に基づいてザームエル・ヘンツィと彼の関わったクーデター事件の経緯が主人公ユーリエの視点から詳細に描かれ、作品の中でかなり大きな比重を占めている。

「ヘンツィ陰謀」は、当時、民主政の形をとりながらも、内実は寡頭政治によって硬直化していたベルン共和国政府に対し、真の民主化と自由化を求める比較的大規模なクーデター事件であった。事前に露見したことで未遂に終わったが、発覚直後に逮捕されたヘンツィを含む首謀者3名が処刑されることとなった。スイスの中でも表向き最も安定していると思われていたベルン共和国において起こった政府転覆計画であり、またその中心人物とされたザームエル・ヘンツィが当時、啓蒙知識人の一人として国内外でその名を知られていたため、事件発生から終結までドイツでも連日のように報道され、大きな注目を集めたのである。

事件当時ベルリンに住んでいた20歳の若きゴットホルト・エフライム・レッシング(1729-1781)もこのスイスで起こった出来事に触発され、『ザームエル・ヘンツィ』という戯曲を構想している。4年後の1753年、仕上がった冒頭部分が断章の形で発表され、もし最後まで完成していたならば彼の作品の中では珍しく同時代の出来事を扱った作品となるはずであった。しかし、直近の事件を新聞報道と間接的な伝聞をもとに構想したため明らかな事実の誤認もあり、また事件自体が未だ解明されない多くの謎を含んでいることもあって、発表直後から作品の真実性をめぐって様々な批判を受けた。その結果、続編の発表は諦められ、作品は未完のままに残されることになったのである。レッシングに執筆の継続を思いとどまらせる最大の原因となったのは、ヘンツィと同じくベルン出身で、連作詩『アルプス』の詩人としても知られる学者アルブレヒト・フォン・ハラーの介入であったとされている。

ザームエル・ヘンツィとベルンの自由化運動

ザームエル・ヘンツィは 1701 年ベルンの牧師の息子として生まれた。ヘンツィ家は、祖先が 16 世紀初頭にベルンの市民権を得て政治参与の資格をもち、かつては大参事会の議員も出したことがあったが、その後の寡頭政治の進行とともに政権からすっかり遠ざかっていた。ヘンツィは初等教育を終えた後 14 歳でベルン塩取引所の簿記係となる。一時は商才を発揮しバーゼルのツェースリン商会の事業にも関わり、かなりの財産を得るが昇進に対する不満から塩取引所の職を諦める。1741 年、イタリアに渡りモデナ侯爵の軍務につき、これ以降、「ヘンツィ大尉」と称号付きで呼ばれることとなった。しかし、当時オーストリア継承戦争の最中で、イタリアに進出したオーストリア軍によりモデナ侯爵は領地を奪われ、ヘンツィ大尉も俸給の支払われないまま解任されている。既にこの時点で、彼の生涯に最後までつきまとう運の悪さが見て取れるが、これらの不運が後に社会への不満となり、強いではベルンの政治体制への批判にもつながったと考えられる。

彼はアカデミックな教育こそ受ける機会はなかったものの、子供の頃から知識欲は旺盛で、独学で極めて高い教養を身につけている。彼が処刑された後、ドイツの新聞が掲載した追悼文は「塩取引所で絶え間なく仕事をしていても、教養人の多いベルン共和国で名声を獲得するに十分以上の学識を高める事を怠らなかった。眠る時間を減らし、食卓であれ社交場であれ片時も時間を無駄にせず、毎日の工作中、随時許されるわずか 15 分の休息時間を利用したのであった。このような努力によって彼は、最高の学者の間でもまれなほどに多方面の学問における広い学識を得たのである。彼はあらゆる古代語を理解しただけでなく、ギリシャ語はいともたやすく話したり書いたりした。それは、様々な機会に彼と話をする機会があったギリシャの二人の司教が、たとえヨーロッパ中を回っても彼のような人物にはお目にかかれな

太鼓判を押したほどだ。彼は、ギリシャ語がわかる友達たちとは、他人に読まれないよう手紙やメモをこの言葉でやりとりすることもあった。デモステネスやキケロをはじめ、ホメロス、ピンダロス、ヴェルギリウス、ホラチウスなどあらゆる偉大な詩人の著作、フランスの大作家たちはもちろん、ミルトンやボープの作品も諳んじており、その記憶力は、初めて手に取った本も一度開けば直ぐに暗唱できるほどであった。彼がもって生まれた抜群の記憶力を高めるために不断の努力をしていたことを思えば、このことも驚くには足りぬであろう。既に5年以上も前、彼は自分の書斎に100冊を超える抜き書きを持っていて、読んだ全ての本を抜粋の形で自ら書き写し、また読みながら考えたことが相応しいタイトルを付けて所蔵されていた²⁾と伝えている。モデナ侯爵の軍務を解任されイタリアから帰ったヘンツィは、この高い学識により、ユーリエ・ボンデーリなど良家の子女の家庭教師として生計を立てる。

1744年、ベルン市民の間に起こった嘆願事件によってヘンツィは5年間の追放処分を受け、当時プロイセン王国の領土であったヌシャテルで亡命生活を送ることになる。この事件は、近く予定されていた大参事会の議員選挙を前に、本来政治に関わる資格のあるベルンの一般市民が議会から排除されていることで貧困に陥っていると、硬直化した議員構成を改めて広く市民の中からメンバーを選ぶよう求める請願運動であった。しかし起草された請願書が市当局に渡される前に表沙汰になったことで、1732年来ベルンの市長を務めていたイザーク・フォン・シュタイガーにより請願書の署名者が弾圧されたという事件である。ヘンツィは署名には参加していなかったにもかかわらず、請願書の作成に関わった咎で処分を受けることになった。この事件ではヘンツィの友人で、後にレッシングとも知り合う数学者ザームエル・ケーニッヒ (Johann Samuel König, 1712-1757) も10年の追放刑を受けてオランダに移住し、その後オランダ皇太子に教育係として仕えることとなる。

このヌシャテルでの亡命生活の間、ヘンツィは主に著述活動に専念し、初めて作家として身を立てていこうと考えたように思われる。この亡命の前後から 1749 年に処刑される直前までチューリヒの J. J. ボードマー (Johann Jacob Bodmer, 1698-1783) に宛てて書かれた書簡が残されているが、これらの文面からはヘンツィの関心が政治よりもむしろ文学の方面にあったことがわかる。この時期ボードマーは親友ブライティンガーとともにライプツィヒのヨーハン・クリストフ・ゴットシェートとの間で文学のあるべき方向をめぐる激しい論争を展開していた。いわゆる「チューリヒ文学論争」と呼ばれるもので、フランス文学に範をとり文学において規則を重んずるゴットシェートに対して、想像力を重視しミルトンを高く評価するボードマーとブライティンガーが批判を加えたのである。この論争はドイツ、スイスの知識人を巻き込んで互いにゴットシェート派とボードマー派とに分かれ、当初の純粋な文学論議を越えて、相互に相手方を揶揄し人身攻撃を専らとする罵り合いともいえる状況にまで発展することになった。ベルンでは 1739 年ドイツ協会 (die Deutsche Gesellschaft) が設立され、その主導者 J. G. アルトマンや G. ヒュルナーらにより次第に親ゴットシェート派の立場が明白となってゆく³⁾。一方これに反発するヘンツィやザームエル・ケーニッヒらはベルンにおける「批判派」 („Frondeurs“)⁴⁾を形成することになった。チューリヒのボードマーは、ともに博学で文筆の才にも恵まれたこの二人に強力な味方を見いだしたのである。

ヘンツィはボードマーに宛てた書簡の中で、ゴットシェートとベルンのドイツ協会の活動について次のように伝えている。「いったいゴットシェートの権威は、破門という武器によって一人の男の幸せをたちまちに打ち砕いてしまうほど強いものなのでしょうか。その男は、愚かしい偶像からヴェールのようにもやもやした王冠を吹き去ろうとしただけなのです。ああ、何たるご時世でしょう。相手がそのつもりなら、こちらは短い槍をもって突撃したり棍棒で殴りかかるのではなく、遠くから遠隔射撃を試みましょう。かの至

高の司祭が冠と王笏を捨てて降参するまで、私も喜んでお手伝いするつもりです」⁵⁾と協力を約束し、ゴットシェートの学説を信奉するベルンのドイツ協会の活動について「我らが尊敬すべきドイツ協会のお歴々は、彼らの詩神の聖なる泉が湧き出ているだけで満足せず、さらに強く流し出そうというのです。選り抜いた書物の洪水で教養世界を水浸しにするつもりです。彼らのアポロ神の秘密の手引き書を何千部も印刷して（むろん民衆の頭むけに簡略化してですが）一般市民の間に広めようとしています」⁶⁾と報告している。

ヌシャテルでヘンツィはスイス・メルクール誌 (Mercure suisse)、ヘルヴェティア・ジャーナル誌 (Journal helvétique) の編集に携わり、また自ら一連の叢書「ミゾデーム (民衆嫌い) の気晴らし」 (Les Amusements de Misodème) や「ピンドス山の飛脚」 (La Messagerie du Pinde) を発刊して、これらの中でゴットシェート及びベルンのゴットシェート派の人々を辛らつな風刺によって攻撃する（「ミゾデームが何度かフランスのヘボ文士にも噛みついたのは本当ですが、ドイツ人たちのことも忘れたわけではありません。かなりの数が既に仕上がっており、一挙に世に出したいと思います。上流の家庭にも届くように、冊数が二、三十号程度に達するまで待っているところです。」1747年1月2日、ボードマー宛て）⁷⁾。

これらゴットシェートに対する攻撃とともに、主君にあたるモデナ侯爵やヌシャテルの領主プロイセン国王フリードリヒ二世がオーストリア継承戦争でオーストリア・ザクセン連合軍を打ち破ったホーエンフリートベルクの戦いを賛美する詩を書き、新しいベルンの市長クリストフ・フォン・シュタイガーを賞賛する頌歌（「ピンドス山の飛脚」に収録）を書いており、これらの作品から、ヘンツィの文章が高尚な文学をめざしたものではなく、啓蒙主義文学には一般的な特定の目的を持った機会詩あるいは実用文学 (Gebrauchdichtung) の域を出ないといわれているが、死の前年の1748年には、パリで上演するための悲劇『グリスラー』を執筆している。

今、詩の導きの星——あるいは凶星かもしれません——が私に創作意欲を与えてくれ、悲劇を書くよう駆り立ててくれています。これはスイス国民の名誉となるはずの作品で「グリスラー、あるいは開放されたるヘルヴェティア」という題です。私はテルの子供を娘にし、グリスラーにも息子があることにします。この男の子がテルの娘と愛し合う場面を創作することで、フランスの劇場向けに密やかな情事を盛り込むのです。よくご存じのように、フランス人は恋愛物語がない芝居は数分たりとも見続けようとしません。8月3日に書き始めて、二三日中には仕上がると思います。」(1748年10月10日、ボードマー宛て)⁹⁾。

この戯曲『グリスラー、あるいは罰せられたる野心』⁹⁾は1996年に原文のフランス語とドイツ語の対訳版で復刊されたことで現在でも入手できる唯一のヘンツィの作品となっている。圧政を敷くハプスブルクの代官ゲスラー(=グリスラー)に抵抗し、自由を求めて立ち上がったスイス建国の英雄ヴィルヘルム・テルの伝説に基づいたこの作品は、ヘンツィ自身ボードマーに対し「国家の政治は私には全く関心はありません。私が思いこがれているのは詩の国パルナッソスです」¹⁰⁾と述べているにもかかわらず、直後に起こった反逆事件を考え合わせるなら、冒頭で紹介したE.ハスラーの小説『テルの娘』における描写を待つまでもなく、当時のベルンの政治状況が二重写しになった極めてアクチュアルな作品であることがわかる。処刑当時から、レッシングをはじめとしてスイス国内外で巻き起こり、現在にまで続くヘンツィ同情論にもこの悲劇は大きな役割を果たしたと思われる。

「ヘンツィ陰謀」

1749年、市民の中に二十数名の逮捕者と3名の処刑者を出した「ベルン市民騒動」(Berner Burgerlärm)は、事件の中心人物の一人とされたザームエル・ヘンツィの名前をとって一般に「ヘンツィ陰謀」と呼ばれている。しかし大著『ベルン史』の著者リヒャルト・フェラーはヘンツィの人物と行

動には概ね批判的であるが、それでも「ヘンツィは陰謀を計画したのではなく、その誘惑に誘われてしまった」¹¹⁾と述べているように、ヘンツィは少なくとも本来の意味での首謀者ではない。事件の一月前にボードマーに宛てた手紙に「パリ旅行の準備でこのところ大変忙しいのです。今週か来週のはじめには出発する予定です」¹²⁾と報告しているとおり、パリでの『グリスラー』の上演による作家としての成功を夢み、同時にゾロトルンのフランス公使館の通訳の職を得るべくパリに赴こうとしていたのである。その彼が何故、同じ時期にこの政治事件に関わったのか、その動機については事件直後から様々な推測がなされてきている。

ヌシャテルでヘンツィは、二度の結婚から生まれた二人の息子を亡くし、ベルンで所有していた資産の多くを失って経済的に困窮するが、1747年、新しく市長となったクリストフ・フォン・シュタイガーを称えた頌詩が功を奏し、五年の追放刑を一年減じられ翌年ベルンに戻る。市の図書館の下級司書の職を得るも、空いた上級司書の地位に18歳の若者が任命されたことでせっかく手に入れた下級司書の職も辞してしまう¹³⁾。一部で言われているように、これが直接のきっかけとなったかどうかはともかく¹⁴⁾、人事のあり方をめぐり市政への不満が高まったことは想像に難くない。

本来ベルンでは、政治参与資格は市民¹⁵⁾に平等に与えられていたはずのものであった。しかし18世紀にはいると、二百人議会と呼ばれる大参事会(der Große Rat)の議員は80程度の家族によって占められたまま固定しており、公式には1年任期ながら再任が禁止されなかったことで一度選ばれば事実上の終身職となっていた。また8～10年ごとに欠員を補充する選挙も大参事会内部で行われたため、自ずと身内を後任に選出するネポティズムが公然とまかり通り、その結果シュタイガーやヴァッテンヴェール等ごく少数の門閥名家の一族で議席の過半数が占められることとなった。外から新たに政権に参与する者は極めて稀な例外的事例であり、またアルブレヒト・フォン・ハラー選任の例のようによほど有力な支援者の推薦がなければ難しく、

そのため大多数の市民は事実上、政権から除外されていた。そして、この大参事会と、ここが任命する二人の市長（Schultheiß）と 25 名の閣僚からなる小参事会（der Kleine Rat）による、ともに硬直化した寡頭体制によって、政府や役所の主要なポストはもちろん、当時ベルン共和国の従属州であったヴォー州やアールガウ州の郡代官等々、高い俸給を伴うあらゆる公的人事が決定されていた。市民にとっては文字通り「大参事会の議席は死活問題だった」¹⁶⁾のである。

この状況に対し、18 世紀に入って既に 1710 年と 1744 年の二回、大参事会への門戸開放を訴える運動が市民の間に起こっていた。この中でヘンツィも関与し、これによって追放処分を受けることになった 1744 年の請願事件では、本来、共和国政府への請願は市民の正当な権利であり、不法な行為はなかったにもかかわらず、当時の市長イザーク・フォン・シュタイガーにより厳しく弾圧されたのである。従って、一般市民の間のベルン市政への不満は解消されないままであり、またヘンツィら請願事件の処分者に対する同情も根強く、1749 年の「陰謀」が秘密集会の形をとったのも 1744 年の反省からであった。

この「陰謀」事件の経緯についての誤謬が、ハラーをはじめとした、レッシングの戯曲『ザームエル・ヘンツィ』への最も大きな批判の理由となっているので、主にリヒャルト・フェラーの記述¹⁷⁾によってその経過をたどりたい。

クーデターのそもそもの主導者は、香辛料商人ガブリエル・フューターであり、彼の回りに革鞣職人ゴットフリート・クーン、市門警備隊のエマヌエル・フューター少尉、ワイン商人ニクラウス・ヴェルニールら体制に不満を持つ市民や商人、軍人らが密かに集まった。既に作家としてその名が知られ 1744 年の歎願書起草者の一人でもあったザームエル・ヘンツィにも誘いがかけられ、クーデターの趣意書は彼の名によって作成されることになった。

この趣意書は 1799 年付でベルンのある愛国者の名によって「注釈と事実

訂正」を付して印刷されているが40頁を越える長文である¹⁸⁾。ここでヘンツィは、12世紀末ベルヒトルト・フォン・ツェーリングゲンによるベルン市建設まで歴史を遡り、1218年に皇帝フリードリヒ二世によって保証された自由証明書(die goldene Handveste)と、その後1384年に市民蜂起によって勝ち取った庇護証書(Schimbrieff der Stadt Bern)の存在を確認する。この1384年の庇護証書はベルン共和国の「唯一の基礎」¹⁹⁾をなすものであるにもかかわらず、既に長らく国家の文庫に秘蔵され一般市民の目に触れることがなかったため、その原文を掲げ²⁰⁾、現実のベルンの政治の実態がいかに原則とかけ離れているかを明らかにし、現在の支配者たちが貴族化した「政権篡奪者」(Usurpator)であると批判する。ヘンツィの批判は重税、共有財産の収奪、道路建設の重い負担、政府の宗教政策や外交政策にも及び、さらには、今や貴族化した門閥名家たちの祖先を逐一取り上げ、ゴットシェート派との文学論争を思わせる揶揄と嘲笑を交えてその不名誉な出自を暴露することさえ憚らない²¹⁾。

ヘンツィの趣意書は最後に、彼ら門閥貴族たちによって「ベルンの町はその自由の最頂上から奴隷状態の谷底へと転落したことは明白」であるとし「不意の急襲により篡奪者たちの王座を揺るがし、涙ながらの嘆願にも和らぐことのないその頑な心を雷鳴のごとき武装決起で打ち砕き、力づくで正当なる政治形態へ転換す」²²⁾べきであると訴え、「予定されたる政府形態」として、国民による閣僚(Magistrat)の選任、チューリヒやザンクト・ガレンの例に倣って職業組合の人員比率に従って大参事会のメンバーを構成すること、二人の市長を一人に減らし4年の任期を導入すること、奴隷所有の禁止、国家文書庫の開放等々、21項目の改革案を提示し、末尾に「決起人の誓」を載せて終わっている。

1749年6月25日、29日の両日、密かに集まった参加者の前で、ヘンツィはこの趣意書を読み上げ、決起の期日は7月13日と決ったものの具体的な計画を詰められないでいるまま、二度目の集会にたまたま参加したある神学

生の軽率な行動により計画は事前に暴露することとなる。7月2日の夜、密告により蜂起の計画を知った参事ティリエールは翌日、密かに枢密院会議を開いて報告し、これに対する善後策を取り決める。一斉逮捕は4日の朝に行われ、その際、クーデターの中心人物の名は確認されているとはいえ、まだグループがどれだけの範囲に広がっているのかは不明で、しかも、首謀者に市門警備隊のフューター少尉の名前があったことで秘密保持のため近郊のシュッテッテルンなどから市中警備のための応援部隊の派遣を依頼している。また検挙が続く間、町はパニック状態に陥り「婦人や娘たちは家を出ず、拳銃を握りしめて、襲撃者を熱湯で撃退するために湯を沸かして待った」²³⁾という。

ヘンツィは事が発覚したことを知らず、目前に控えたパリ旅行の暇乞いのために教え子ユーリエ・ボンデーリの住むブルクドルフを訪れ、その帰路、ベルンから捕縛に向かった郡代官ボンデーリとフォン・ヴェルトによって逮捕され、取り調べの後、16日の大参事会で死刑宣告を受け、翌日、同じく死刑判決を受けたヴェルニール、フューター少尉の二人とともに斬首された。なおフューター少尉は市門警備の任にありながら国家反逆を企てた廉で、斬首の前に右手切断という二重の刑罰が科され、また、逮捕を逃れた本来の首謀者ガブリエル・フューターとクーンには、本人不在のまま人形による象徴的な処刑がとり行われている。

この事件は発覚直後からドイツの新聞でも毎日のように報道され、当初の「閣僚と高位高職にある市民数名を殺害し、財宝を奪い取り、政權を我がものとせんとする忌まわしい目的」(7月12日ベルン発)²⁴⁾をもった反乱とする論調は、ヘンツィの逮捕と趣意書の内容が知られるにおよんで次第に同情論も高まり、「今や世間では、共同謀議者たちの意図が、誰かの生命や財産、自由を狙ったものではなかったと、噂されている」(7月26日バーゼル発)²⁵⁾と、そもそも計画は政府要人の殺害を企図したものではなかったとの説を載せる新聞も現れた。またヘンツィの処刑をめぐってはゾロトルンのフランス公使の抗議を受けるなど批判も多かったため、ベルン政府は事件につ

いての自らの立場を弁明する詳しい報告書を印刷し配布することになった。

レッシングの戯曲断章『ザームエル・ヘンツィ』

当時ベルリンにいたレッシングは、このヘンツィ事件に関する新聞報道と口頭による伝聞²⁶⁾に基づいて戯曲『ザームエル・ヘンツィ』を構想し、1753年「書簡」の第22号と23号に発表する。アレキサンダー詩形で書かれたこの作品自体は、3つの場からなる第1幕と、第2幕の同じく3場までしか書かれていないが(第2幕第3場は途中まで)、これを補足する形で作品の意図と未発表部分の構想が紹介されている。

[...] 煽動者を愛国者と対照させ、弾圧者たちを誠実な国家元首と対照させて描こうというのが私の意図でした。ヘンツィは愛国者でデュ・クレストが煽動者です。シュタイガーは誠実な国家元首で、何人かの参事会員は弾圧者となるのです。ヘンツィは心情、精神ともに卓越した人物で、国家の利益のみを考え行動します。彼を動かしているのは利己心ではなく、変化への欲求でも復讐心でもありません。失われた自由を再び以前の範囲にまで拡大する事だけを求めているのです。彼はこれを出来る限り穏やかな手段で実現しようし、たとえそれが不可能な場合で暴力を使わなければならないとしても、極力慎重を期します。デュ・クレストは正反対です。憎悪と流血への欲求において、この人物の真価と大胆さが十全に発揮されるのです²⁷⁾。

と、主要な登場人物の性格を規定した上で、以後の展開については次のように暗示される。

ヘンツィと仲間たちはデュ・クレストという人間を熟知しており、彼を嫌悪し、何とかしてこの男から離れようとしします。しかしこの人物は自ら国家元首になることを望み、ヴェルニールとの関係を利用し、ヘンツィが信用できない人物だと思わせようとするのです。これが失敗して仲間たちから侮辱を受けた時に、同士を裏切ることでこの陰謀から逃れようとするのは彼の気質からしても自然きわまりないことでしょう²⁸⁾。

レッシングは、ベルンで起こった事件をドラマ化する際に、実際には発覚から逮捕まで3日にわたった出来事を一日の出来事に集約している。これは想定された上演場所の空間的制限を考慮し、あえてフランス古典演劇の三一致の法則に従った意図的なものであるとも述べているが²⁹⁾、ベルンに二人存在した同名の市長イザーク・フォン・シュタイガーとクリストフ・フォン・シュタイガーが、一方は自由化運動の弾圧者であり、他方はヘンツィに好意的な支援者であるにもかかわらず、作品の中で改革に理解ある一人の理想的な人物になっているのは、おそらくは最初から単純化を意図したものではなく作者の誤解によるところが大きいと思われる。しかし、最大の問題は、事件のいわば陰の黒幕とし、さらに密告者とされたデュ・クレストの人物設定であろう。

デュ・クレストの邪悪な性格は既に発表された断章の冒頭でも明確に示されている。作中ヘンツィがヴェルニールに同士の中にデュ・クレストが入っていることを打ち明ける場面、

ヘンツィ [...]

あの怪物が押しかけて我々の仲間に入ってしまった。
 多くの人々が口を極めて罵る逃亡中の煽動者、
 罵られるのも当然で、国家のことなど念頭になく
 復讐と残忍だけを求めて我々に近づいた。
 あの男が専制君主を憎悪するのは、血を見たいがためだけだ。
 運命の悪戯で、そんな男を我々は仲間としなければならなくなった。
 それが僕がいま悩んでいる理由だ。あの狂気の人物が恐ろしい。
 もしかすると我々をもろともに破滅に引きずり込むかもしれない。

ヴェルニール いったい誰なんだ？

ヘンツィ 行く先々で平和を乱してきた男、

つい最近、厚かましくも君の娘との結婚を望んだ男だ。

ヴェルニール 誰だ？ デュ・クレストか？

ヘンツィ まさに、あいつだ。

ヴェルニール あの恥知らずか？

[...] ³⁰⁾

(第1幕第1場)

あるいは、デュ・クレストがヘンツィに向かって政府高官の殺害を示唆する場面、

デュ・クレスト 雑草を除去しようとする者が、根を哀れんで良いものか。

根は、慈悲深い人間を新たな労苦でもって報いるだけだ。

だから我々が後の世の人々を圧政から救い

我々が子孫を解放したいと願うのならば、

専制政と暴君を打ち倒さなければならない。

暴君の死によってのみ専制政を打ち破ることが出来るのだ。

フューターとヴィース、リハルトも私と同じ考えだ。

みんな、おまえの善良さが妨げになると考えている。

見ろ、ヘンツィ、このリストには、今夜我々の手によって、

冷たくなる運命にある人物の名前が全て書いてある。

[…]

読んでみろ、ただし、名前の多さに驚かないように気をつけろ。

この者たちに直ちに死んでもらうことで自由が呼び覚まされるのだ。

[…]³¹⁾

(第1幕第2場)

これらの場面からも、理想主義者ヘンツィと対比させるために、デュ・クレストが目的の追求ためには手段を選ばないマキャベリスト的人物に仕立て上げられていることがわかる。デュ・クレストの名前は、事件直後からドイツで報道された新聞記事の中にもしばしば出て来ており、革命家として——悪名も含めて——既に名の通った人物であったために、当初は確かに事件の中心人物と見なした報道もあった³²⁾。しかしベルンの判決は結局デュ・クレストの事件への直接の関与は認めず、従って処分者のリストにも入っていない。レッシングの作品には多分にシェークスピアの『ジュリアス・シーザー』を意識したところがあり、テーマをより明確にするために、白黒の図式で主人公との対比を強調しようという意図もあったと思われる。ただし、そのために——たとえ名うての「悪人」であったにしても——無関係とされた事件においてもその罪を帰し「黒幕」や「裏切り者」に仕立て上げることの当否が問題にされたのも当然であろう。しかも、レッシングがこの作品を発表し

た当時、まだデュ・クレストは生きていたのである。

ジュネーブ出身のミシュリ・デュ・クレスト (Jacques-Barthélemy Micheli du Crest, 1690-1766, ドイツ語名 Dücret) は要塞建築の専門家であると同時に水銀を使った温度計の製作など多方面の才能を持った技術者で、スイスではアルプスの山々の標高を測定して最初の学術的なアルプス・パノラマを作った事でも知られている。彼は古い貴族の家系に生まれながら、1736 年ジュネーブで増税策をきっかけに起こった支配者層 (シトワエン) に対する市民 (ブルジョワ) の反乱では市民の側にたち、彼らに有利な譲歩を引き出すことに成功する。狂信的ともいえる自由主義者で過激なまでの革命の闘士でもあり、スイス及びフランスでおこった幾つかの「陰謀」に荷担したとされる。ジュネーブを去った後も、パンフレットを武器にベルンやチューリヒの貴族的な支配体制を激烈に批判し、これによりベルンから追放され、ヘンツィと同じ時期に、比較的行動の自由は認められていたもののヌシャテルで監禁状態にあった。1999 年に出版された P. マイヤーのミシュリ・デュ・クレストの伝記でも、事件に関連して首謀者 G. フューターが幾度かヌシャテルにデュ・クレストを訪れ説得を試みたものの最終的な同意は得られず、唯一彼から得られた助言は「将来、スイス連邦国会議事堂が建設されるべき場所と位置」³⁰⁾であったという。事件後、彼はアールブルクで終身禁固となり 1766 年に没するまでその地で過ごすこととなる。

直接の原因となったかはどうかはともかくも、レッシングが作品の完成を諦めたことに最も大きな影響があったと言われているのは、当時ゲッティンゲン大学に勤めていたアルブレヒト・フォン・ハラーの手紙である。ハラーはベルン共和国政府の委託を受けて作者にその手紙を書いたとも言われているが、手紙自体は残念ながら残っていない³⁰⁾。しかし 1754 年 3 月 23 日の「ゲッティンゲン教養新聞」(Göttinger Anzeigen von gelehrten Sachen) に掲載された書評からハラーの批判の内容を知ることが出来る。

[...] しかしながら『ザームエル・ヘンツィ』の第1幕と第2幕の場面については注釈が必要だろう。古い歴史を語る場合にさえ、人物や民衆が当時の性格を保持していることは是非とも必要なことだ。ピエール・コルネユがともかくも賞賛されてきたのは、彼がローマ人をローマ人として語らせているからで、ラシーヌはアレキサンダーやオイディプスの時代にまでフランス人の軽薄な趣味を持ち込んだことで批判されてきた。だが、もし登場人物たちの多くがまだなお生きている新しい歴史を扱おうとするなら、真実を述べなければならない義務ははるかに大きいであろう。この点でレッシング氏は非常に重大な誤りを犯している。もっとも、この誤りが、この悲劇の典拠となっている例の人伝えの報告のせいだと思いたいものだが。我らはともかく真実と正義に照らし、あの不幸な反逆者たちの性格をそのまま描き出さなければならない責任がある。なぜなら我らが詩人レッシング氏は彼らの性格を歪曲し、名誉ある一共和国の尊厳を損なっているからだ。当時既に軟禁状態にあったミシュリ・デュ・クレストが、ベルンで起ころうとしたあの血なまぐさい謀議の首謀者でないのは、犯人の自白調書から明らかになっている。デュ・クレストはかつて熱狂的な民主政崇拝者であったし、今でもそうであるが、謀反人たちに何らかの助言を与えたのは確かにしても、内容はそれほど残忍なものではなかった。この残忍な暗殺計画はフューターやヴェルニールら他の者たちが心に抱き、考え出したもので、ヘンツィもこれに反対はしなかった。彼が他の者たち同様に参事会や役所のメンバーになる資格が奪われていたという事実はなく、悪事をさえ企てなかったならば、境遇の改善を望む機会はみんな持っていたのである。ヴェルニールの性格は極度に歪められており、ミシュリもこの共同謀議を暴露しようなどと考えたことは一度たりともなかった。この不幸な出来事にはこれ以上触らずにそっとしておいて、悪事を自らの血で償ったあの哀れな者たちを墓の中で静かに休ませてあげようではないか。さもないと全てが白日の下にさらされ、ヘンツィについてもレッシング氏が思い描くのととは全く違った気質の人間であったことが明白になりかねないのだ³⁵⁾。

蜂起が本当に政府要人の暗殺を企んでいたものであったのか、これは議論のあるところであるが、事実関係に関する限り、ハラーの上の指摘は概ね正当なものであろう。しかし、クーデターによって民主化を成し遂げようとしたヘンツィに対するある種の反感をともなうその行動への断定的拒絶と同時

に「彼が他の者たち同様に参事会や役所のメンバーになる資格が奪われていたという事実はなく…境遇の改善を望む機会はみんな持っていた」とする現状認識には、現実の陰の部分の直視しようとせず、あくまでもベルン共和国の体制を擁護しようというハラーの保守性が感じとれる。ハラーも若い頃はベルンの墮落した政体を辛辣な風刺詩 („Die verdorbenen Sitten“ 1731, „Der Mann nach der Welt“ 1733) によって批判したものの、1745年にイザーク・フォン・シュタイガーの推薦により念願の大参事会議員に選ばれた後は、後のルソーへの反発に見られるように本来の保守的性格が強くなったといわれる³⁶⁾。そして公職を得るためにはヘンツィ同様、自分の詩の中でベルン市長のシュタイガーを賞賛することさえ辞さなかった。彼は長らくゲッティンゲン大学で解剖学と植物学を教えその博学の評判は高く、また既に1729年に発表した連詩『アルプス』の成功で詩人としてもその名がヨーロッパ中に知られていた。そのハラーでさえもベルンの市政に参加するためには、有力者のツテを頼る等、ありとあらゆる努力を払わなければならなかったのである。エヴェリーヌ・ハスラーは小説の登場人物に託し、次第に高まりつつあったヘンツィの作家としての名声へのハラーの嫉妬をほのめかしているが³⁷⁾、ゲッティンゲン大学哲学部の名誉教授が与えられ、ウプサラ・アカデミーの会員やイギリス国王ジョージ二世の主治医にも選ばれ、1749年には神聖ローマ皇帝フランツ一世より貴族に列せられる等々、国外では輝かしい経歴を持ったハラーも、ベルン共和国での公職はやはりヘンツィと同じくベルンの市民図書館から始まっている。

ハラーの批判以外にも、レッシングの戯曲『ザームエル・ヘンツィ』をめぐるのは発表直後から毀誉褒貶、様々な議論が生じ³⁸⁾、これらが直接の原因であったかどうかは確認できないが、結果的に続編の発表は諦められた。未完に留まったにもかかわらず——あるいは、まさにそれ故にこそ——レッシングのこの作品は後々ヘンツィへの興味をいっそう駆り立てることになった。

ベルン州のヘルツォーゲンブーフゼーで生まれ、歴史小説『アンナ・ヴァー

ザーの物語』で知られる作家マリア・ヴァーザー (Maria Waser, geb. Krebs, 1878-1939) もヘンツィ事件を題材とした短編小説『死刑判決』(Das Bluturteil)³⁹⁾を書いている。ここではヘンツィのかつての教え子であったロンバッハ郡代官夫人スザンネが主人公で、彼女は少女時代、自分の愛情を拒んだヘンツィへの恨みとその妻カタリーナへの嫉妬心から、当初ヘンツィの理想に心酔していた若い少尉を誘惑し、ヘンツィを極刑に導くことで復讐を遂げる。しかしその直後にアーレ川に身を投げて自らも命を絶つのである。この短編小説ではヘンツィは主人公スザンネの目を通してのみ描かれるだけであるが、作者マリア・ヴァーザーはこれ以前に『ヘンツィとレッシング』と題する歴史評論を雑誌に発表しており、この評論の中では、ヘンツィは、一般に言われているようにクーデター計画に自らの意志に反し受け身の姿勢で誘い込まれたのではなく、古い体制を打破して自由の理念に基づく新しい国家をベルンに打ち立てようとした信念を持った革命家であったことを強調する⁴⁰⁾。彼女は、レッシングが描こうとした理想主義者ヘンツィの像を受け継ぎ、さらに積極的に自由の追求に燃える革命家へと推し進めているのである。

ベルン近郊コノルフインゲンの牧師の家に生まれた作家フリードリヒ・デュレンマットは、ベルン州文学大賞を受賞した1979年「文化政策について」と題した講演の冒頭でレッシングの『ザームエル・ヘンツィ』を引き合いに出して以下のように述べている。

[...] ヘンツィは18世紀の半ばに、お偉方の支配していたベルンの国家にいくらかより民主的な制度を与えようと試みました。しかし、私は賞を受けたのに、彼は処刑されたのです。もっとも状況によっては処刑もまた名誉であることは一言断っておかねばなりません。ヘンツィ事件で何があったのか、本当にベルン政府がレッシングの友達ハラーを通じて介入したのかどうか、それはそれとして、レッシングがこの自由のドラマを完成しなかったのは残念なことです。もしシラーの『ヴィルヘルム・テル』と並んでもう一つレッシングの作品『ザームエル・ヘンツィ』があったなら、我が国にとっては素

晴らしいことだったでしょう。なぜなら、我が国には外国人と戦った自由の戦士がいただけではなく、スイス人によって抑圧され、命さえ奪われた者たちもいたということが、その作品を通して明らかとなったからです⁴¹⁾。

ヨーロッパで民主政体の模範と思われていたベルン共和国では 18 世紀にはいと権力集中の弊害が顕著になっていた。このことはベルンに限らず、スイスの他の州でも多かれ少なかれ事情は同じであった。ヘンツィがベルンの新しい制度の模範としようとしたチューリヒでも、1862 年にともにボードマーの弟子である J. C. ラーヴァーターと画家 J. H. フュースリはグリューニンゲンの郡代官グレーベルの不正を告発したことで市当局から叱責を受け一時国外逃亡を余儀なくされている。

1798 年、スイスに侵入したフランス革命軍によりそれまでの 13 州からなる旧スイス連邦は解体され、新たにヘルヴェティア共和国が成立する。しかしこのフランスにならった中央集権体制は、多言語多文化国スイスにはなじまず、各地で反発が起こり、1803 年ナポレオンの調停による「スイス連邦」が復活することになる。自由と平等を旗印とするフランス共和国の影響下で起こったこれら一連の変革の中で、スイスでも徹底した民主化が行われることになった。国内の支配地・被支配地関係は解消され、都市部と地方の住民の権限も対等のものとなる。それまでベルンの従属州として郡代官によって統治されていたアールガウ州や、1723 年ダニエル・ダヴェル少佐による独立運動が起こったヴォー州もベルンの過酷な支配から離れ独立した州として連邦に加盟する。ヘルヴェティア共和国の草案を作ったバーゼル出身のペーター・オックスは、パリでは戯曲やオペラ台本の作家でもあった。オックスはフランス軍を祖国に導き入れた「売国奴」としてスイス人には極めて評判が悪いが、しかし、彼によって体现されたフランス革命思想は当初スイスでも一般民衆だけでなく支配層の間でも歓迎するものが多かった⁴²⁾。50 年前にヘンツィが打ち砕こうとした、特権階級による政治の弊害はなおも続いてい

たのである。

18世紀は啓蒙主義の普及とともに解放運動の歴史でもあった。ベルンやジュネーブだけでなく、バーゼルやトッゲンブルク、ラヴェンティーナでも自由と権利の平等を求める蜂起が起こったが、一部は成功するものの、そのほとんどは鎮圧されている。スイス全土に真の自由と平等の原則が普及するためには、フランスの武力によらなければならなかったのである。

ゴットフリート・エフライム・レッシングの戯曲『ザームエル・ヘンツィ』は未完に留まったものの、デュレンマットの言うように、スイス国内での自由と独立を求めた戦いの文学的記憶として、エヴェリーヌ・ハスラーにいたる現在までも作家たちの興味をかきたて続けているのである。

《注》

- 1) Eveline Hasler: Tells Tochter. Julie Bondeli und die Zeit der Freiheit. Roman, München u. Wien, 2004.
- 2) Gotthold Ephraim Lessing: Werke 1743-1750. Hrsg. von Jürgen Stenzel, Frankfurt/M., 1989. (Gotthold Ephraim Lessing: Werke und Briefe in zwölf Bänden, Bd. I; Bobliothek deutscher Klassiker 47) S. 1183f.
- 3) Vgl. Jakob Baechtold: Geschichte der deutschen Literatur in der Schweiz, Frauenfeld, 1892, S. 567f.
- 4) Gotthold Ephraim Lessing: Samuel Henzi. Trauerspiel [Fragment], nebst Briefen von Samuel Henzi an Johann Jacob Bodmer, hrsg. und mit einem Nachwort versehen von Ulrich Weber und Rudolf Probst, Bern, 2000, S. 70.
- 5) Ebd. S. 68f.
- 6) Ebd. S. 72.
- 7) Ebd. S. 76.
- 8) Ebd. S. 77.
- 9) Samuel Henzi: Grisler ou l'ambition punie. 1748/49, Tragédie. Grisler oder der bestrafte Ehrgeiz. 1748/49, Tragödie, hrsg. von Andreas Kotte in Zusammenarbeit mit der Schweizerischen Gesellschaft für Theaterkultur (SGTK) und dem Institut für Theaterwissenschaft der Universität Bern (ITW). Deutsch von Kurt Steinmann, Basel, 1996.
- 10) Briefe von S. Henzi an J. J. Bodmer. In: G. E. Lessing, Samuel Henzi, S. 77.
- 11) Richard Feller: Geschichte Berns III. Glaubenskämpfe und Aufklärung 1653 bis 1790. (Zweite korrigierte Auflage) Bern u. Frankfurt/M., 1974, S. 453.
- 12) Briefe von S. Henzi an J. J. Bodmer. In: G. E. Lessing, Samuel Henzi, S. 79.

- 13) ヘンツィ自身は、年俸が少ないので「その地位を希望しなかったばかりでなく、下級職も諦めることにした」と言っている。Ebd. S. 77.
- 14) R. Feller, S. 460.
- 15) 当時ベルンでは政権参与資格を持つ「市民」(Burger) と居住だけが認められた「住民」(Bewohner) の区別があった。
- 16) R. Feller, S. 109f.
- 17) Ebd. „Die Henziverschwörung“, S. 447-463.
- 18) Samuel Henzi's und seiner Mitverschwornen Denkschrift über den politischen Zustand der Stadt und Republik Bern im Jahr 1749. Mit historischen Erläuterungen und Berichtigungen. (1823)
- 19) Ebd. S. 407.
- 20) Ebd. S. 405f.
- 21) なおヘンツィの趣意書の記述には編集者の事実訂正 (Berichtigungen) のコメントが示すとおり、かなりの誤謬または意図的歪曲が混入している。
- 22) Ebd. S. 439f.
- 23) R. Feller, S. 459.
- 24) G. E. Lessing, Werke 1743-1750, „Quellen“ S. 1166-1197, hier, Quellen-Nr. 5, S. 1169.
- 25) Ebd. Quellen-Nr. 12, S. 1176.
- 26) この「口頭による伝聞」はクリストロップ・ミーリウスによるもので、ミーリウスはヘンツィの友人ザームエル・ケーニッヒと手紙のやりとりがあったという。Ebd. „Entstehung“, S. 1200.
- 27) G. E. Lessing, Samuel Henzi, S. 34.
- 28) Ebd.
- 29) Ebd. S. 33.
- 30) G. E. Lessing, Werke 1743-1750, S. 504.
- 31) Ebd. S. 507f.
- 32) Vgl. G. E. Lessing, Werke 1743-1750, u. a. Quellen-Nr. 7 (Basel, vom 15. Julius), S. 1172 etc.
- 33) Pirmin Meier: Die Einsamkeit des Staatsgefangenen Micheli du Crest. Eine Geschichte von Freiheit, Physik und Demokratie, Zürich u. München, 1999, S. 169.
- 34) Briefe von und an Lessing 1743-1770, hrsg. v. Helmuth Kiesel, Frankfurt a. M., 1987, (Gotthold Ephraim Lessing. Werke und Briefe im zwölf Bänden, Bd. II/I; Bobliothek deutscher Klassiker 47) Brief-Nr. 65, S. 61 u. das Stellenkommentar dazu, S. 741. J. G. ツィマーマンはハラーに宛てて「レッシングと頻繁に会う機会のあるライブツィヒのチャルナー氏からの便りでは、レッシングは、自分が発表した悲劇の断章『ザームエル・ヘンツィ』の素材に関するあなたの手紙で大変いらだっているようです。彼は登場人物の名前だけ変更して、すぐにも全体を発表したいと考えています」と伝えている。G. E. Lessing, Werke

1743-1750, S. 1204 より引用。

- 35) G. E. Lessing, Samuel Henzi, 35f.
- 36) Vgl. Christoph Siegrist: Albrecht von Haller, Stuttgart 1967, S. 8f. u. R. Feller, S. 589f.
- 37) E. Hasler, S. 162f.
- 38) Vgl. G. E. Lessing, Werke 1743-1750, „Zeugnisse der Wirkung“, S. 1203-1218.
- 39) Maria Waser: Das Bluturteil. In: Von der Liebe und vom Tod. Novellen aus drei Jahrhunderten, Stuttgart u. Bern, 1919, S. 135-184.
- 40) Vgl. G. E. Lessing, Samuel Henzi, S. 58f.
- 41) Friedrich Dürrenmatt: Essays, Gedichte. Gesammelte Werke Bd. 7, Zürich, 1996, S. 800f.
- 42) François de Capitani: Beharren und Umsturz (1648-1815) In: Ulrich Im Hof u. a.: Geschichte der Schweiz und der Schweizer, Basel, 1986, S. 511. (Kapitel 5, übersetzt von U. Sturzenegger)

(たむら・ひさお 政治経済学部准教授)